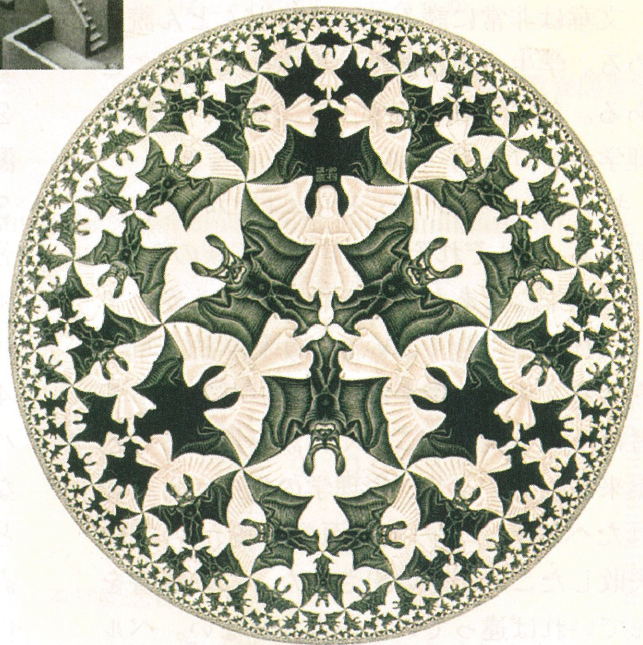




一冊の新書を手にもいつくまに

白 鷹 増 男

本についてのエッセイを書けということであるが、さて。

学生に推薦している副読本のなかから一冊の新書が目にとまった。表紙をめくると謹呈と書かれた著者の署名が目に入る。懐かしい、達筆ではないが、今となっては本当に懐かしい特徴ある手書きの文字である。いろいろなことが走馬灯のようによみがえってくる。フランス帰りの精神科医ということであったが、口髭を蓄えた小柄な体にスーツ姿で現れた。柔和で如何にも育ちのよさそうな容姿ではあるのだが、そのスーツ、上下左右四分劃してそれぞれ赤白、白赤であった。林峻一郎先生¹⁾との初対面の瞬間である。赴任した年の夏だったので、かれこれ40年近く経ってしまった。

さて、この新書「ストレス」の肖像²⁾を手にとってペラペラと拾い読みしてみる。もちろん精神科医である著者の手になるこの本の主題は、ストレスであることは分かっている。文章は非常に読みやすい。どんどん読み進める。学生への推薦書の理由の第一はここにある。第二章古典時代 ここでは、著名な生理学者クロード・ベルナール、ウォルター・B・キャノン、ハンス・セリエについて書かれてある。それぞれその出自から家族のこと、実験の様子などあたかもその場にいるかのように（林先生らしく、いささか科学的文章とは異なる文体で）書かれている。したがって読者は小説を読むがごとくに読み進めることが出来る。ふと、昔、生理学の先生から紹介されたベルナールの実験医学序説³⁾の読破に失敗したことが思い出された。この新書を読んでいれば違っていただかもしれない。ベルナールや彼の著書は生理学の授業で必ず最初に出てくる名前で、実験医学とは現在の生

理学のことである。彼の“内部環境”の発見やキャノンによる“ホメオスターシス”等は本学学生のように生命科学をめざすものにとって初年次に理解しておくべき内容であるが、この新書（の数ページ）によってその概要がつかめることが第二の推薦理由である。そういえばお父上⁴⁾が高名な大脳生理学者で、木々高太郎の名で小説を書いておられた。先生も精神科医になる前は一時文筆業をしておられたと聞いたのでこれらの文章も理解できる。ついでだが、生理学の研究は推理小説によくたとえられる。この推理小説という名称は林麟氏、いや木々高太郎氏によるものだそう。

先生の高弟であられる佐藤浩信先生からご連絡をいただきながら最期のお別れに行けなかったことが悔やまれる。

合掌

1) 林峻一郎 (1930-2008)：三田文学編集主任ののち精神・神経科学を専攻、医学部心理学非常勤講師、WHO、ペルーのリマ精神衛生研究所、本学衛生学部教授など歴任。

2) 「ストレス」の肖像 中公新書、1993. [新潟・教養・看護図書館にあり]

3) 実験医学序説 クロード・ベルナール著、三浦岱栄（みうらたいえい；元慶応大学神経科学教授）訳、岩波書店1938 初版発行、1950 改訳発行 [両版とも教養図書館にあり]

4) 林麟（たかし）：元慶応大学生理学教授、パブロフの弟子、大脳生理学者、「頭の良くなる本」、「頭脳パン」、「人生二度結婚説」などで有名、また、本名をばらして作った木々高太郎の名で小説家。推理小説という名称を作る。松本清張を世に出す。

(人間科学教育センター・健康科学単位)

こ の 一 冊

廣岡秀明

『科学的とはどういう意味か』

森博嗣著

幻冬舎

子供のころは、算数や理科がわりと好きで得意だったのに、中学、高校と進むうちに、いつしか嫌いでわからない科目に変化したという人も多いと思う。そしていつしか、「難しいことはいいから、結論だけ言って」というような考え方に陥ってはいないだろうか。このような現象が、いかにして起こり、それがどれだけ本人にとって不利益をもたらすのかを、先の震災の中に例を挙げながら説明を試みているのが本書である。特に、試験勉強において、名前と現象などを1対1に対応させながら覚えることの危険性、数値を評価し身の

安全を判断することの重要性など、卑近な例えが多く書かれている。著者は、某国立大学で建築学を研究する傍ら、小説家として多くのミステリーを世に送り出したことでも知られているので、ファンの方も多いと思う。そのため、小難しい文章もなく、容易に読了できるのではないだろうか。試験勉強に際して「何を覚えていいかわからない」と思っている学生諸君に、ぜひとも読んでもらいたい一冊である。

(一般教育部・物理学)

図書館の本棚から

伊藤茂樹

『サイキック・ツーリスト: 霊能者・超能力者・占い師のみなさん、未来が見えるって本当ですか?』

ウィリアム・リトル著 阪急コミュニケーションズ

請求記号 147.4 L71

本書は著者が自分の姉に買った星占いセットで始まる。それに示された不吉な占いの結果に現実主義者とおもわれた著者の姉が動揺し、著者にどなりこんできたことをきっかけにジャーナリストである著者がそもそも占いによって未来がわかるのか検証することを思い立つ。著者は英米の占い師・霊媒師等のサイキックといわれる人々にインタビューを敢行し、時には自分を占わせることにより検証しようと試みている。また科学者・関係者への取材を通じサイキック自身やそれを取り巻く問題点も示されている。例えば、サイキックと

その信奉者にある依存関係の問題、サイキックの言葉によって傷つけられた人々のメンタル面の問題、マスコミによる事実歪曲などである。そういったなかで著者がどういう結論を出していくのかが、本書の見どころである。本書はそれを膨大な量の取材に基づいて書かれて時にはシリアスな内容も含んでいるが、全体的にユーモアのある語り口で物語られているため大変読みやすいので楽しんでいただけるのではないだろうか。

(教養図書館)

開館スケジュール

		開館時間
9月5日～1月末（後期授業終了）まで	平日	9：00～19：00
	土曜	9：00～13：00
年末年始	閉館	
1月初め～後期試験終了まで	平日	9：00～19：00
	土曜	9：00～13：00
後期試験終了後	平日	9：00～17：00
	土曜	9：00～13：00

休館日：日曜日、祝日、第2・4土曜日、本学記念日

そのほか、臨時閉館や開館時間の変更があるときは、その都度掲示でお知らせしますのでご注意ください。

隠れた数学

中 筋 麻 貴

表紙の絵はマウリッツ・コルネリス・エッシャー (Maurits Cornelis Escher, 1898-1972) という名のオランダの画家 (版画家) の作品です。はじめて彼の作品を見た時、これはおもしろいととても感動したのを覚えています。彼の作品の魅力は、一見矛盾のないように見えるのに、いつのまにか自然の法則に反する状況がうまれていたり (表紙、左の絵)、同じ絵なのに見方をかえると突然違う絵が見えてくるところ (表紙、右の絵) です。特に表紙右の絵では、もともと見ていた絵 (例えば白い天使に注目した絵) と新たに見える絵 (黒い悪魔に注目した絵) にとてもきれいな対称性が含まれているのも魅力です。

本来、美しいと感じるものには、図形や立体の幾何学的な対称性や規則性などのルールがあります。私たちはそういった規則正しく並んでいるものに安心を覚え、「美しい」と感じるようです。エッシャーの絵はどうでしょうか。対称性や規則性がありますが、それがどこかで矛盾しています。それでも「おもしろい」「美しい」と感じます。これは「矛盾する美しさ」とでも言えはいいのでしょうか。

私たち数学者は、数学がきれいに成立しているものを「美しい」と言います。つまり、複雑な条件が単純できれいな等式で表現できる、解がきれいな形で求まる、式や図形に対称性が見られるといったことです。エッシャーについて調べてみる

と、彼は数学のアイデアに魅了されてこのような作品を作ったのだそうです。そのような目でみると、なるほど彼の絵の中の対称性や規則性には数学的な要素がちりばめられています。きれいな数学が隠れているから彼の絵を美しいと感じるのだと思えば少し納得がいきます。しかし、そもそも数学は、矛盾しているものを許容しない理路整然とした学問です。したがって、美しいと感じるものを分析すると、その中に対称性や規則性といった数学が影響していたというのはとても自然ですが、エッシャーの絵は矛盾を含むような不思議なものにも関わらず、数学がきれいな形で影響を与えて美しいと感じるわけです。純粋な美しさ、矛盾する美しさのどちらにも数学が隠れている、これはとても興味深いことです。

皆さんの周りにある美しいもの、不思議だけど美しいと感じられるものにも、その中には数学が含まれているかもしれません。どんな数学が含まれているのか考えてみるのもおもしろいかもしれませんね。

(一般教育部・数学)

写真出典先:

The Official M.C. Escher Website

<http://www.mcescher.com/>

左: Waterfall 1961

右: Circle Limit IV, 1960

閲覧ニュース109号 2011.10 発行

発行責任者 江 川 徹

北里大学教養図書館

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1

電話 (042) 778-8005